

ありすがわ たるひと  
有栖川宮熾仁親王と出口王仁三郎

# 落胤問題を実証する

(一)



出口和明

## 第一章 サンデー毎日に載った落胤問題

今から二十数年前の『サンデー毎日』(昭和五十三年十月一日号)に「大本教出口王仁三郎は熾仁親王のご落胤」という、半ば茶化しぎみの記事が載って、茶の間の話題を呼んだ。昔の世

間の評価を知るために、全文を紹介する。

大本教の聖師、出口王仁三郎は有栖川宮熾仁親王のご落胤であつた—思わず「またまた、ご冗談を」といいたくなる新説が発表された。出口和明『出口なお・王仁三郎の予言・確言』(光書房)で初めて明かされた秘話。戦前、皇室批判のため不敬罪で過酷な弾圧を受けた丹波の民衆神道、大本教。その大黒柱の王仁三郎が実は皇室の血をひいていたという意外性は、真偽はともかく、やっぱりちよつと興味ぶかい。

### 京都・伏見の船宿で忍ぶ恋

この手の「貴種伝説」は珍しいものではない。あのイエス・キリストもずうつとたどつていけば、ダビデ、ソロモンを経てアブラハム、ノア、そして雲の上の神につながってしまう。

# 大本教 出口王仁三郎は熾仁親王のご落胤?



新朝野宮熾仁親王

昭和の出口王仁三郎

大本教の聖師、出口王仁三郎は、丹波の民衆神道、大本教の大黒柱として知られる。戦前、皇室批判のため不敬罪で過酷な弾圧を受けた。その大黒柱の王仁三郎が実は皇室の血をひいていたという意外性は、真偽はともかく、やっぱりちよつと興味ぶかい。



船宿

### 京都・伏見の船宿で忍ぶ恋

この手の「貴種伝説」は珍しいものではない。あのイエス・キリストもずうつとたどつていけば、ダビデ、ソロモンを経てアブラハム、ノア、そして雲の上の神につながってしまう。

サンデー毎日掲載の記事

したがって、このたびの王仁三郎ご落胤説も、このパターンの一つと考えられなくもない。ただ一つ、ご落胤説が熱狂的な信者の捏造したものではなく、しかも大本教の歴史が浅いために証言などが残っている点が、無視できない。

それに著者、出口和明（四八）は王仁三郎の孫にあたる（つまり皇族の血統ということになる）が神がかったところがない。「本当は、この問題に触れられなかった。しかし、この背景がわからなかったら、ご落胤でありながら皇族を批判しなければならぬ王仁三郎の悲しい心が理解できないと、思いきって書いてみた」

というのである。

出口和明さんは王仁三郎の三女、八重野の長男。王仁三郎が「十和田湖の竜神の生まれ替わり」と予言した人物で、名に「和」の一字が秘められている。幼少より「逆賊の子」として石を投げられたりして育つ。早大露文科中退、名古屋で大学の食堂を経営していた昭和三十八年、第二回オール読物推理小説新人賞を受ける。ペンネーム「野上竜」。同時受賞に西村京太郎がいる。さて、出口和明さんの論旨にのっとって王仁三郎ご落胤の経過をたどってみる。

有栖川宮熾仁親王（一八三五〜一八九五）は、明治維新の東征大総督として錦旗を掲げ「宮さん宮さん、お馬の前にひらひ

らするのは何じゃいな、トコトンヤレトンヤレナ」と北上した徳川追討の総大将。また、皇女和宮の悲恋の相手としても知られる。のちに元老院議長、陸軍大将、左大臣となる。

熾仁親王が、王仁三郎の母、上田よねと出会ったのは京都・伏見の船宿。明治元年、禁門の変に連座したとして蟄居を命じられた親王は、よねの叔父が営む船宿の料理屋へしばしば憂悶の船（註・船で船宿に通ったと書くのは記者の勘違い。実際は馬で通うお忍び）を運び、よねと知り合う。

懐妊に気づいたよねは郷里へ帰り、急いで養子に吉松を迎えた。

王仁三郎（幼名、喜三郎）は、結婚七カ月で生まれる。しかし「男の子なら殺される」といわれ、出生は極秘にされたという。王仁三郎は貧農の子として成育し、数え二十八歳で大本教初代教祖出口直と出会い、翌年入信。三十歳で、直の長女すみ（二代教主）にムコ入り。丹波の百姓女（註・大工の未亡人）直が興した大本教の教義を整理、強力な民衆神道に育てあげた。直をキリストとすれば、王仁三郎はキリスト教をユダヤ教の一派から世界宗教にしたパウロに想定される宗教的巨人。

### 秘かに父の名を歌に詠んで

この王仁三郎ご落胤の傍証となるのは四つある、という。

その1 王仁三郎が「たるひと」の四文字を歌いこんだおび  
 ただしい短歌。たとえば――

からたまも靈魂も空より降りたるひとの出ずば闇は暗れまじ  
 五十鈴川澄わたりたるひと筋の清き流れぞ世を洗ふなり

その2 出生の時に親王がひそかに贈ったという守刀があつ  
 た(所在不明)

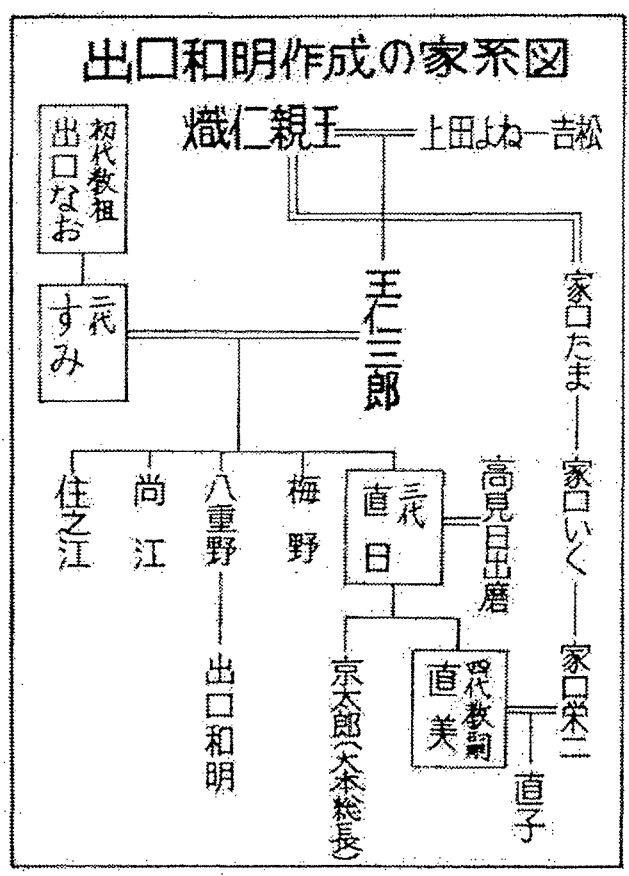
その3 親王が贈った短冊(警察に押収されたが、戦後返さ  
 れ、再び不明)。この短冊を出口住之江は覚えている。「熾仁親  
 王の御名と印と花押がちやんとあつた」と語り、作歌に夢中にな  
 っていたので歌もそらんじていた。

わが恋は深山の奥の草なれや茂さまされど知る人ぞなき

出口和明さんは、この歌から親王と上田よねの逢瀬の船宿を  
 「伏見の深草」と推定している。

その4 産着の白い倫子の小袖(これも不明)。実物を見たの  
 は二代教主すみ。大正六年、ご落胤の噂を聞いて、王仁三郎の  
 母よねに詰問に走った。その時、白い小袖を見せられ、衝撃を  
 うけたと伝えられる。

また、王仁三郎は「幻の父」熾仁親王への思慕は激しく、曾  
 孫(四代教嗣)直美の夫に熾仁親王の孫(唯一の孫と認められ  
 ているという)家口栄二を迎えている。栄二の祖母たまは、親  
 王につかえていたことは親王の日記に見える。



サンデー毎日掲載

著者、出口和明さんは語る。

「国つ神(註・国祖国常立大神)を抑えこんで暗黒の世にしてし  
 まった悪の根源は、上に立つ神のせいだ、と大本教は主張して  
 いた。国つ神は日本はおろか世界を統べる神で、上に立つ神と  
 いうのは大本教は弾圧を恐れて明らかにしてこなかったが、検  
 察の方は天皇と解釈していた。そうとすれば、王仁三郎が親王  
 の落胤であることは彼自身にとつても致命的な欠陥はずなん  
 です。だから、王仁三郎はひそかに短歌に父の名をよみこんだ  
 りしていたんでしょねえ」

さらに、こんな解釈もある。

「第二次大本事件の第二審公判で、ご落胤問題が俎上そじょうに上がった。昭和十五年十二月ですが、大本教の王仁三郎が自分で有栖川宮の遺児いじだというのは、これは重大な不敬罪ですよ。鬼の家権力が見のがすはずはない。昭和の天一坊という大事件になるはずです。けれど検察は深く追求しない。あまり触れたがらないんですね。彼らは王仁三郎ご落胤が、真実であることを知っていたんです。だからヤブをつついてヘビを出すことを恐れたわけでしょう」

ご落胤といつてもしよせん男女のひめごと。科学捜査でもしなければ本当のところはわからない。

『評伝・出口王仁三郎』(三省堂)を書いた村上重良慶応大講師は、

「ご落胤説はほうぼうにある貴種伝説の一つで、真偽は問題にならない。論外ということです。この話も、王仁三郎が日本の支配者になるという主張をアピールするために、かなりあとになって流されたものです。彼は自分を天皇になぞらえるのが好きな人ですからね。白い馬にまたがってみたり、本名の喜三郎の代わりに王仁三郎と名乗ったり……。王仁きみひとは皇族の名前ですからねえ」

もつとも、和明さん、あえてがんばらない。

「丹波は京の背中ですから、女官の供給源であった。そのうちの

何人かが貴種を身ごもって帰郷する。格別珍しいことじゃなかったでしょうねえ」  
本誌・山本 茂

村上重良は落胤説を頭から否定するが、それが当時の知識人の常套じょうたう的思考であろう。しかし落胤説を確かめもせずに否定するのでは、この世に「落胤」なるものは存在しなくなる。

あれからも大本教団本部の否定にもめげず、私は落胤説を唱え続け、最近では、次第に耳を貸して頂ける時代になった。

私は、王仁三郎が有栖川宮熾仁親王の落胤であることを誇ほこりつもりは、さらさらしない。本願寺ならいざ知らず、私には皇室と親戚づきあいするほどの暇ひまもないし、興味もない。それでもなお、私が固執こしつするわけは、ただ一つ。王仁三郎の血は、のちにふれるように、教義の根幹こんかんにかかわる重大問題(悪の御用)であるからこそ、私はなんとしても明らかにしたいのだ。

本誌の誌面を借りて何回か連載させていただく予定なので、どうぞ読者諸氏もじっくりと読んで、御意見をお寄せ下さい。

### 現われた物証の短剣・毎日新聞で報ず

サンデー毎日が報道した年の昭和五十三年十二月十日、毎日新聞が「サンデーレポート京都」で落胤説を追った。それは「大本教聖師出口王仁三郎」・「ご落胤説が再燃」・「現れた物証の短

剣・孫が発表・教団内外で論議呼ぶ」の見出しで報じられたものである。

戦前、皇室批判のため不敬罪などで二度の弾圧を受けた大本の聖師、出口王仁三郎は実は、有栖川宮熾仁親王の落胤だった。王仁三郎の孫で大本教団の出口和明氏（四八）が近著「出口なお、出口王仁三郎の予言、確言」でこんな説を発表、教団内外で論議を呼んでいる。最近「物証」とされる短剣まで出現するに及んで「落胤説」はエスカレートの一途。真偽のほどはさておき、第二次弾圧（昭和十年）前に教団内で落胤説が流布していたのは事実のようだ。しかし、一方では「なぜ、今ごろ

出口王仁三郎



燃え再説落胤

現れた「物証」の短剣

有栖川宮熾仁親王

教団内外で論議呼ぶ

毎日新聞掲載の記事

になつて」と当惑する声も。今年には王仁三郎没後三十年。三十年というのは大本には因縁の数字である。再燃し始めた落胤説にスポットを当ててみた。（亀岡・村山 治記者）

### 「有栖川宮との間に」

有栖川宮熾仁親王は明治維新の東征大総督で、皇室典範による皇位継承順位第一位とされた人。また、皇女和宮の悲恋の相手としても知られる。和明氏の落胤説とはこうだ――。

旧穴太村（現亀岡市）に生まれた王仁三郎の母よねは明治二年秋、奉公先の京都・深草の船宿で親王と知り合い、王仁三郎を身ごもった。親王はまもなく官につき東京へ。よねは帰郷し「落胤」をかくすため吉松を養子に迎えた。そして実子、王仁三郎が七カ月児で生まれた。祖母うのは当時の政治情勢から、落胤であることがわかると殺されると思い、戸籍操作で、吉松の入籍を一年早め、逆に王仁三郎の誕生を一年遅らせた。

### 「信者が名乗り出る」

和明氏はその根拠として親王がよねに与えた守り刀、短冊、小袖などの存在をあげているが、いずれも現在は行方不明のため、説得力を欠いていた。ところが「予言、確言」を読んだ信者の南陽彦さん（五二）＝亀岡市横町、写真館経営＝が十一月中旬

「父親の代に聖師の側近から預かった短剣がある」と名乗り出たことから一躍脚光。

短剣というのは両刃で刃渡り十五・一センチ。小型で女性の守り刀とみられ、目くぎのわきに直径一センチの十六葉の菊の紋が刻まれていた。和明氏によると、これは昭和十年、王仁三郎が昭和神聖神社（亀岡市）の三種の神器の一つとして納めた剣で、王仁三郎が「母の形見」ともらっていたという。十六菊は明らかに皇室の印。戦前の天皇制絶対の下で庶民がこんな剣を持てるわけはなく和明氏は親王がよねに与えた守り刀に違いないというのだ。

信者宅で見つかった物証とされる菊の紋付き短剣（左）



毎日新聞掲載

### 「教団幹部は当惑気味」

落胤説に対する教団当局の反応は……。和明氏のいところで教団の若きプリンス、出口京太郎総長は「聖師は自伝の中で自らを貧農の子だとしている。（註・これについては三章で反論するので、参考にされたい）菊の紋の入った短剣は古い神社にはいくらかもあり、物証とはいえない。科学的に根拠のない話はどうも……」。その他の教団幹部も露骨にいやな顔はしないが「小説の世界ならともかく、現実問題としては論外。和明氏の狙いがわからない」とむしろ当惑気味なのだ。

しかし、古くからの信者数人の話を総合すると「聖師自身、落胤であることを認めていたし、よねさんからも確かめた。昭和初期からの信者ならだれでも知っていますよ」という。弾圧を受けるまではかえって落胤説を誇りにしていた節もあるのだ。

### 「信者は、関係なし」

一般の信者らは「真偽は私たちに関係ありません。聖師が言われたのだからただ信じるだけ。それが信仰ですよ」ということらしい。だが教団としてはそうもいつてられないのである。落胤説が事実なら大本の勲章であった「反権力」の基盤が崩れてしまう。曲げられた者だけが「建て替え」に参加できる

という教義は揺らぎ、戦後三十三年かかってやっとぬぐい去った「邪教」のイメージがまたまといつく。

大本の「正史」である「大本年史」執筆者の一人、大國美都雄さん（八二）は「執筆に先だつて落胤説を検討したが、戦後十五年たった当時でさえ教団内部では、誤解されやすい論議は時期尚早との意見があつて見送つた」という。

### 「宗教性への問題提起」

最近の大本を評して「あれは文化団体だ」との声がある。「邪教」からの脱皮を指摘すあまり、本来のエネルギーを失つていくとの批判も。落胤説はその意味で、現代大本の宗教性に対する一つの問題提起といえよう。それにしても没後三十年、いまだに子孫を走らせるあたり、怪物といわれた王仁三郎の面目躍如。当のご本人、霊界で落胤説をどう受けとめているだろうか。

そしてこの記事の最後に「信者宅で見つかった物証とされる菊の紋付き短剣」の説明つきで、両刃の剣の写真が掲載されている。

なお欄外に大本の説明があるが、当時のジャーナリズムの評価を知る上で、掲載しておこう。

「大本とは」「大本七十年史」によると王仁三郎は明治四年、亀

岡・綾部の貧農の子として生まれ、数え年二十八で綾部に設立されたばかりの大本教に入信。三十歳で教祖、出口なおの末子すみ（二代教主）にムコ入りし、オカルト的要素の濃い教義を整理、強力な宗教団体につくりあげた。しかし「建て替えて建て直し」「神の前の絶対平等」を説く激しい主張と教勢を恐れた当局は、大正十年、昭和十年の二度にわたつて弾圧、邪教のイメージを植え付けた。戦後、復権してからは平和運動に力を入れ、特に最近ではキリスト教との合同礼拝や、伝統芸術の海外キャラバンなど国際化指向が目覚ましい。公式発表によると信者は現在十五万人。

この一連の記事からもう二十三年も経過した。大本の幹部たちは王仁三郎の落胤問題を外部から問いかけられると、否定するか無視しようとする。大本教団本部はこれからもこの冷たい無関心ぶりを続けるつもりだろうか。

たしかに王仁三郎は落胤問題を公式に肯定してはいない。当時の現人神天皇制下でできなかったことぐらゐ、誰でも知つてゐることではないか。王仁三郎の行動や文章の行間を見れば、胸迫るほど感じられよう。有栖川宮熾仁親王の落胤であることは、王仁三郎の宿命であり、悲痛なるアイデンティティーですらあつたのだ。

教団は落胤説の真偽以前に、「王仁三郎はそんな主張をしたことなんか無いよ」と、そらとぼけるつもりなのか。大本教団本部あげて、「王仁三郎は信用ならぬ大嘘つきだ」と内外に声明を発しているのは彼らなのだ。

それは教団を現教主の意図をくんで、立替え立直しなどしらん顔の体制迎合、既成教団に墮落させたい意図にほかならぬ。

王仁三郎の苦しい胸のうちを、次の歌を拝読して、真剣に味わってほしい。

啼き涸れて今は声なき時鳥焦るる袖に五月雨の降る

(註・時鳥の血を吐くばかりの叫びは、おびただしい歌となって残っている。ほととぎすはみずからは子を育てず、一卵を他鳥の巢に産み落とす。やがて養い親よりも大きく育った子は、まだ見ぬ親を求めて雲井はるかに飛び立つ)

父君と名乗りもならぬ運命の綱にひかるる身こそ悲しき

悲しみの瞳かわかずある吾のまだ晴れやらぬ丹波霧かな

身のすぐせ思ひ悩みて行く吾の心曇らす丹波霧かな

天地の広きが中に誰も知らぬ一輪の花埋もれて咲く

一輪の経綸の花は醜草の中にひそみて香をぞ放てる

太元の神と教祖を外にして花の所在を知れる聖なし

そして次の一首をどう読み解いたら良いのだろう。

罪穢れあら人神の安かれと朝な夕なに神前に祈る

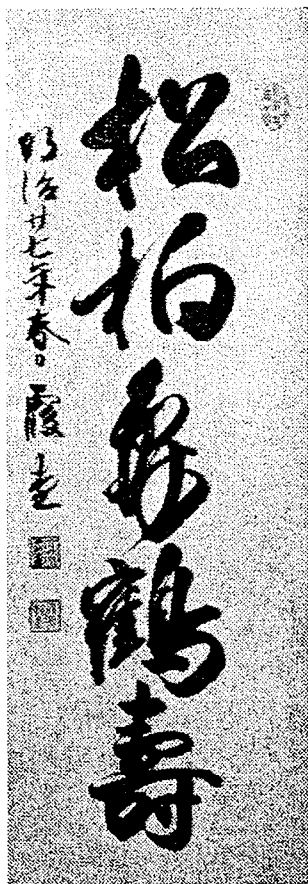
(靈界物語六十二卷三百九十頁)

現人神—この世を持ち荒らした上に立つ神。国祖神の目からは、もつともすさまじい罪けがれ、ある神に違いない。

オリオン星座に押し込められ、六年八カ月もの陰惨な境遇に耐えながら、王仁三郎はその天皇の身上の未来を案じ、その安泰を祈るとは—。

身をもつて、上に立つ神(父親王も含めて)の深き罪をあがなおうとする王仁三郎の愛であろうか。

(敬称略)



熾仁親王殿下御書「松柏亀鶴寿」

「有栖川宮・高松宮ゆかりの名品展」財団法人 日本美術協会

註・明治二十七年春は(親王薨去二十八年一月十五日)最晩年の作。

霞堂は、敷地一万五千坪の霞関本邸にちなんだ号。